

戦前期における沖縄観光と心象地理

神 田 孝 治

要 旨

本研究では、戦前期の沖縄観光の成立とそれに関連した諸問題について、沖縄の心象地理に注目して検討した。その結果、戦前期の沖縄への観光客は海運交通の発達を背景に漸次増加しており、特に1937年に大阪商船が船舶を大型化・高速化させパックスツアーを企画してから沖縄観光が注目を集めたこと、そして「蘇鉄地獄」と呼ばれた貧困の沖縄の心象が、観光客の増加に伴い次第に南国のエキゾチックな心象に置き換えられる傾向があったことが確認された。さらに、当時の沖縄には与那国島の女護が島幻想に代表される女性的な心象があり、それが投影された那覇市の辻遊廓が観光空間化していたこと、またそこには従順でエロティックな女性という楽園的な心象に、熱帯の野卑な住民という沖縄を低位に位置づける心象地理が織り込まれる傾向があったことが認められた。加えて、1939年に柳宗悦を中心とした日本民芸協会同人が沖縄団体旅行を行い、沖縄工芸の宣伝を雑誌上や東京での展覧会において実施したことが、沖縄への観光を促進していたことが確認された。さらに、沖縄の観光振興も企図した日本民芸協会の第2回沖縄旅行団が観光事業関係者も含めて実施され、その際に那覇市にて開催された1940年の「沖縄観光と文化に関する座談会」での議論などから、戦前の観光地としての沖縄には均質化と差異化の間の近代の矛盾が前景化しており、日本人としての沖縄住民のアイデンティティの問題と深く関わるなかで、言語、墓地、沖縄の呼称などの問題をめぐって、観光が非常にポリティカルな議論の中に巻き込まれていたことが判明した。

キーワード：沖縄、観光、心象地理、辻遊廓、日本民芸協会

1 はじめに

1937年、大阪商船は新造船の波上丸・浮島丸を大阪那覇線に就航させると、「沖縄視察団」と称する団体旅行を企画するなど、沖縄観光キャンペーンに力を注ぐようになった。この沖縄の魅力について大阪商船は、例えば1939年に発行した観光パンフレットの『沖縄へ』で以下のように記述している。

南溟の王国として古来数奇な歴史に育まれて来た沖縄は、今や産業振興計画着々と成り、文化の粉飾を新たにしてわれらの南方関心線に鮮やかに浮び上つてをります。蘇鉄の山、榕樹の巨木、バナナの林、パパイヤ、マングローブ、熱帯果実の色——これを背景として琉球焼を作る男、蛇皮線をひくアンガーたち、昔ながらの質朴敦厚な人情、珍しい方言など、訪れる者をして一種のエキゾチズムをさへ覚えさせます。

沖縄はまさにただ一つ残されたわが国の「観光處

女地」であります¹⁾。

この言説から、大阪商船は、「観光處女地」と表現するこの沖縄観光黎明期において、南国の植物や文化を紹介してエキゾチックな心象を喚起することで、沖縄への観光客誘致を図っていたことを伺い知ることができる。

ここで表現された沖縄の心象は、サイード (Said, E.) が著書『オリエンタリズム』²⁾ において論じた、「なじみの深い『自分たちの』空間と、その自分たちの空間の彼方にひろがるなじみのない『彼ら』の空間とを心のなかで名付け区別」³⁾ することによって生じた「心象地理」として考えることができる。この心象地理は、まなざして支配する主体としての西洋、観られ従属する他者としての東洋などのように、権力の道具として二項対立的に生み出され、特に他所の心象地理には、観光客などのまなざす側のファンタジーや欲望が投影されている⁴⁾。そのため近年では、紀行文とそこに描かれる他所の心象地理が、植民地主義による支配を正当化する言説装置や、著者の属する文化を明らかにするものとして、注目を集めるようになっていく⁵⁾。

そこで本稿では、このような心象地理に関する議論を参考にし、戦前期における観光客の抱く沖縄の心象地理に注目して、沖縄観光の成立とそれをとりまく諸問題について考察したい。また同時に、戦前期の沖縄観光においてポイントとなったと考えられる代表的な事象を可能な限り網羅することで、その全体像を概括的に明らかにすることを目指したい。このような作業を通じて、これまで等閑視されてきたと宮里⁶⁾が指摘する戦前期の沖縄観光の研究を、幾ばくかでも進展させたいと考える。

まず第2章では、戦前期沖縄の地理的・社会的状況を概観し、その観光地化の過程と心象地理の関係性について簡単に確認したい。なかでも心象地理については、バーバ (Bhabha, H. K.) ⁷⁾ がサイードのオリエンタリズムの議論を批評するなかで論じたような、ステレオタイプ化された他者表象としてのアンビバレントな側面を明らかにするなかで、観光と沖縄の心象地理との関係性を考察することにする。

また第3章では、沖縄の心象地理が、どのように観光空間の形成過程と関係していたのかを考察したい。これは、心象地理を表象として切り離すのではなく物理的空間との関係性を問う必要があるとの指摘⁸⁾ に応えたものでもあり、本稿では特に、女性のエロティシズムの心象地理と、那覇市の辻遊廓を取り上げ、その相互関係について検討する。これらは当時の沖縄観光客の紀行文において頻繁に語られたものであり、多数を占めていたと想定される男性観光客による沖縄観光と心象地理の関係について、その特徴を明らかにするものである。

そして第4章では、沖縄の心象地理と権力の問題に注目し、沖縄人のアイデンティティと観光の相互関係について検討したい。本稿では特に、知識人を中心とした戦前の沖縄観光の促進に大きな影響を与え、かつ観光と政治の問題を前景化させたものとして、柳宗悦を中心とした日本民芸協会の沖縄旅行団と、彼等が参加した那覇市で開催された「沖縄観光と文化に関する座談会」での議論に注目する。また本稿では、ここでの言説を心象地理と観光の関係性に焦点をあてて検討するに際して、心象地理のアンビバレンスの問題と同時に、ルフェーブル (Lefebvre, H.) ⁹⁾ がリゾートなどの差違の空間に特に顕著であるとした、均質化と差異化がせめぎ合う近代空間の「空間の矛盾」に注目して考察することにする。

2 沖縄観光の成立と心象地理のアンビバレンス

1) 戦前期の沖縄の概況

1879年に発足した沖縄県は、東を東経131度19分の北大東島、西を東経122度55分の与那国島、南は北緯24度2分の波照間島、北は北緯27度51分の鳥島までを管区としていた。この地はかつて1429年に成立した沖縄本島の首里を首都とする琉球王国によって治められていた。しかしながら、1609年からは薩摩藩の支配下におかれ、琉球王国は薩摩藩の傀儡政権として存続を許されるようになっていた。そして、1879年に「琉球処分」と呼ばれる廃藩置県が断行され

て日本の領土に組み込まれ、「特別区政」「特別町村制」「特別県政」などの差別的制度が1920年から1921年にかけて撤廃されてから、法政面上での日本本土との一体化を完了させている。

ちょうどこの時期の沖縄は、第一次世界大戦期に生じた基幹産業の製糖業による好景気が過ぎ去り、戦後の大不況と政府による継続的な収奪的政策の結果、経済的に大打撃を被り、1919年以降ほぼ毎年県外移出入交易の移入超過に陥るようになっていた。その結果生じた慢性的な赤字財政は、沖縄の市民生活を窮乏に追い込み、有毒物質を含む野生の「蘇鉄」に食いつがらなくてはならない「蘇鉄地獄」と呼ばれる状態を生み出していた。その後、1930年に疲弊した沖縄経済の救済策である『沖縄県振興十五カ年計画案』が承認され、1933年から実施されたが、振興計画は成果を挙げる前に戦時経済体制に組み込まれていく¹⁰⁾。

2) 大阪商船と沖縄観光の発達

このような状況下にあった戦前期の沖縄に、観光地化のための条件を整えそれを促進したのは、海運業の発達による、本土との時間距離の短縮であった。沖縄の海運交通の近代化は1874年以降開始され、本土との連絡に多くの海運会社が乱立し、競争と協力の綱引を展開していた。なかでもその中核を担ったのが大阪商船で、1884年から大阪—那覇間を10日で結ぶ大阪沖縄線として毎月1回5～600トン級の木造船を就航し、その後は便数を毎月4～10航海の間で増減させながら運行して、1924年に直通航路を開始すると3～4000トン級の船で月5往復3泊4日での接続を実現している。また1916年に就航した鹿児島那覇線を1932年から9往復にすると、その後同年10月からは沖縄航路を独占し、1937年には新造船の波上丸・浮島丸(4500トン)を就航して神戸—那覇間を2泊3日で連絡するようになっていた¹¹⁾。実際に、どの程度の観光客が訪れていたか確認することは出来ないが、船旅による沖縄観光の案内や紀行文が、この船舶交通の発達に伴い漸次増加していたことは認められる。

特に1937年の2隻の新造船の就航は、それを記念した遊覧団体としての「沖縄視察団」が組

織され、1940年まで計23回分の募集がなされるなど¹²⁾、沖縄への観光客増大への大きな契機となっていた。この視察団は、神戸—那覇往復計8日間の旅程で、那覇に船舶が3日間碇泊する間に観光するというものであり、「貸切自動車でも合理的に名勝風色をさぐり、辻での宴会や名物の唐手術、古典劇、闘牛を見学するなど、あらゆる角度から沖縄本島を視察し盡す」¹³⁾とされていた¹⁴⁾。募集人員は、1等2等合わせて30名（第16回から第23回は21名）であり、第6回と第7回の募集広告では「申込殺到して毎回満員」¹⁵⁾であると、それまでの好評ぶりを伝えている。もちろん、団体旅行の人員はさほど多くないが、この旅行に用いられた浮島丸の定員は860名（1等10名・2等50名・特別3等110名・3等690名）であり、この時期に個人旅行の紀行文の方が多く、また沖縄に行く本道は長期の航海を要しない鹿児島経由であったとの指摘もあることから¹⁶⁾、観光客自体はずっと多かったと考えられる。1936年8月には、この新造船を期待して那覇市長を会長とする沖縄観光協会も設立されており¹⁷⁾、まさにこの時期に沖縄観光が実質的にスタートしたのだと考えることができる。

3) 沖縄の心象地理のアンビバレンスと観光

当時の本土の人々は、このような戦前期の沖縄に対して、問題含みの低位の他所と、魅力的な他所という、アンビバレントな心象地理を有していたことを確認することができる。前者については、1930年に『沖縄土産』¹⁸⁾という紀行文を著した秋守常太郎のまなざしにはっきりとみてとれる。観光目的でなく、土地国有化に関する調査で沖縄を訪れた彼は、「四方八方私共の眼に映じたものは単に貧乏と殺風景との外殆んど何物もなかつたのである。斯くて其程度は、同行せられた某紳士は私共と共に約十日間を同島の観光に費さるる予定であつたのに不拘、同島に於ける一切が余りに貧弱であつたのに就き滞在僅かに三日間にして引上られたのを見て、之を知るべきである。」と、「蘇鉄地獄」とされた沖縄が、観光に不向きな貧乏で殺風景な土地であると述べている。

彼はまた資料1のように、「沖縄県に於ける

資料1 沖縄の困窮状態の理由に関する大阪新聞等の説

- 甲、同島は其の全長を通じて世界中最も猛烈なる暴風雨に位して居る結果、一度びそれ等の暴風雨に見舞はるる時は、忽ちにして物質上多大なる損害を蒙ると同時に、精神上に於ける損害も亦甚大であるから、同島民に於て自暴自棄に陥る事。
- 乙、同島が亜熱帯に位し年中を通じて温暖である結果、同島人に於て深く事物を考究する事が出来ぬから、自然に其文化が停滞する事。
- 丙、同島民が懶惰にして生産に努力せぬ事。
- 丁、同島は、慶長十四年以来維新当時に至る迄二百五十年に亘つて島津侯の治下にあり、甚しく搾取せられたから、其創痍が今日に至つて尚癒着せぬ事。
- 戊、同島に於ける資金が欠乏して其金利が高率であるから、同島に於ける事業が興起せぬ事。
- 己、同島に於ける天恵が乏しく天然の資源が貧弱であるのに不拘、同島を独立した県としたのは同島人に於ける虚栄心の発露にして、其結果は税制関係に於て同島は年々莫大なる資金を国庫に搾取せられつつあるから、同島は当分の内台湾及び朝鮮等に準じた植民地制度に引き直し年々相当の補助金を与ふべきである事。

(秋守常太郎『旅行叢書第四 沖縄土産』, 秋守常太郎, 1930, 20-21頁)

資料2 下村海南の沖縄の心象地理に関する言説

沖縄の近ごろ少しく名の売れて来たのは、いい方の名でなくて悪い方の名である。詳しいことは分からぬながら、兎に角沖縄は困つて弱つているさうなといふので、蘇鉄地獄として名が売れ出したのである。

そこへ天水ボーフラだのハブだのいふよろしくない景物がつくのだから、誰も用事を抱へなければ観光見物どころか命がけだといふ。まして時はかかる。船は小さい、海は荒れる。

無論沖縄は狭い、小さいから国立公園の候補地もなく、高山もない、温泉もない。しかしそこに琉球固有の風色がある情調がある、その気分を現すため沖の縄よりも龍宮すなはち琉球の名がピンとくる。僕は琉球をして矢張り一の観光地帯として見たい、さうして琉球の多く知られることが観光する人達の見聞を広くするのみならず、琉球そのものの理解となり同情となり開発となることと思ふ。

(下村海南・飯島曼史『南遊記』, 朝日新聞社, 1935, 186-188頁)

生活が極端に行き詰つて居るのに就て」当時の「大阪毎日新聞社其他に於ける所説」をまとめている。ここから、沖縄の貧困の原因には、物理的にも精神的にも亜熱帯の悪環境が影響していると、当時本土の人々に考えられていた状況をみてとることができる。これはまさに、ハンチントン (Huntington, E.) が『気候と文明』¹⁹⁾で展開したような環境決定論的思考に基づくものであったと考えられる。

他方、下村海南は1935年春の旅行を綴った紀行文で、資料2のように、蘇鉄地獄やハブなどの生息する悪環境としての沖縄が語られる状況の中で、「琉球固有の風色がある情調」に注目して「琉球をして矢張り一の観光地帯として見たい」と、正反対の魅力的な心象地理による観光地としての可能性について言及している。そし

て資料3から、1937年頃には、蘇鉄地獄の沖縄から観光沖縄へとその心象は変化していき、実際に多様な観光客が訪れるようになっていたことを伺い知ることができる。

このような観光客の抱く沖縄の心象地理は、例えば1926年発行の『南島情趣』で本山桂川が、「南欧の空を偲ばしむるやうな輝かしい太陽の直射のもとに、溶樹枝茂り、芭蕉葉そよぎ、佛桑花燃ゆるが如く、阿且木の実つぶらなる南の島…美しい伝説の島、歌と蛇皮線と、そして限りなき享楽と愛執の島——それは南国『琉球』である。」²⁰⁾として描いたような、まさに南国の楽園であった。「沖縄の風物だけは全く独特であり、内地では少しも想像してゐない景観であつた。他所で見られない新鮮味が最も多く感じられた」²¹⁾、もしくは「厚い石垣の塀に続く

資料3 沖縄の心象地理の変化と1937年頃の沖縄観光の状況に関する言説

一時本県のことを蘇鉄地獄の琉球といつたが数年を経ずして振興沖縄に変わり、更にそれでも飽き足らぬと見へて、今度は観光沖縄に発展してきた。我々は前後両者の間に、果してどれだけの差があるのか、知るよしもないが、全く、移れば変る世の中ではある。

ところが観光沖縄と銘打つからには是非人々にも見て貰はなければならんと、その案内役に應はしい大阪商船会社が躍起となつたので最近各方面から雑多な客があつた。ハブとマングースとの喧嘩に目を剥く大阪商人が来たかと思ふと、琉球料理に舌鼓打つ千疋屋主人があり、更に遠路の客としてはベツテルハイムの孫娘が祖父の遺業を探ねてきて物好きにも琉装でカメラに入り、又東京発聲のロケーションではオヤケアカハチを題材として本県に対する一般の好奇心を唆ることによつて営業上の収益をはからうとした。其他最近では非常時景気も添へて郷軍大会が盛大に催され、孤島沖縄はカーキ色で塗り潰された。

（屋部 憲「観光沖縄の街頭より」、月刊琉球1(6)、1937、9-10頁）

赤瓦の屋根のゆたかな反り、その向ふを限るなだらかな丘陵の線、緑の熱帯植物の反映——西欧のそれとは異なつた、一つの異国情緒を十分に満足させて呉れるものばかり。」²²⁾などと論じられたように、沖縄は観光客が属する日常世界とは異なる魅力的でエキゾチックな地として想像されたのであり、アンビバレントな心象地理のうち他所への欲望が投影された一側面が、観光客にとっての大きな魅力になっていたのである。

3 女護が島幻想と辻遊廓の観光空間化

1) 観光客の女護が島幻想

1930年に「琉球国記」と題した紀行文を著した布田虞花は、神戸港を出港する前夜、資料4のように沖縄が「女護が島」だとして友人にからかわれたことを記している。彼はその話が「現代に通用する筈はないと、一笑に附して去つてしまつたけれども、それでもその話によつて、まだ見ぬ琉球国といふものに対する僕の旅情が、前にも増して一段と唆られたことだけは、否定することが出来なかつた。」²³⁾のだと述懐している。

ここで言及された「女護が島」とは、当時、沖縄県の最西端の与那国島の事を指していたようである。先の本山は、資料5にあるように、与那国を「女護ヶ島」であるとし、資料4と同じ草履と女性にまつわる話について伝えてい

る。この草履の話の出自は明らかではないが、資料5から、少なくともこのような逸話が当時流布していた状況と、1893年発行の笹森儀助の著書の影響があったことが推察される。この笹森の紀行文では、資料5のように「此島の婦人色白く、且つ懇切多情なり…」という一節を記していたばかりでなく、「他府県人ヲ歓迎スルト愛嬌溢ルル如キノ風ハ、甚タ他ノ琉球人ト異ナリ」、もしくは「与那国嶋ノ私生児、最モ多キハ各群嶋ニ冠タリ。其比例、公生児四十二対シテ私生児二十一ニ及フ。…是一般一夫ニシテニ婦人ヲ娶リ、或ハ寄留人妾トナル者数多ナルニ因ルナルヘシ。」²⁴⁾などと、そこが女性が溢れる男性にとっての天国として描かれていたことが確認できる²⁵⁾。

しかしながら、当時においても女護が島の話は古の伝説として伝えられており、また本山が「女護島と云はるる与那国島や、南の果ての波照間島などへは、船便もとぼしく、観光のつもりではめつたに行けるところでないことを申添へて置く。」²⁶⁾と記していたように、そこは未発達な交通機関故に観光地には成りえなかつた。そのため多くの男性観光客は、大阪商船の船舶が到着する那覇市において、まなざす対象としての沖縄女性を見出していた。例えば、「夏の沖縄女のあの袖の広い帯も締めない解放的な、而も色彩の単純ないかにも軽々しい芭蕉の蟬の羽の如く、或は蜻蛉の翅の如く見るからに涼しそうな装は内地では先ず絶対に見られないだらう。」²⁷⁾、もしくは「店の主人は大抵婦

資料4 沖縄の女護が島幻想に関する言説

「いや、君はまだ琉球の草履の話を知らないんだね、さうか、ぢやあ教へて遣らう。琉球へ行くとね、浜に沢山草履が並べてあるさうだよ、琉球は君も知ってゐる通り、例の石原小石なんだから、船から上がると直き、怎うしてもこの草履を穿かないといふ訳には行かないさうな」

...

「で、船から上がって直き、なんの気もなしにその草履を穿くといふと、いままで霸王樹の蔭かなんかに、疑つと息を殺して身を隠してゐた琉球の女たちが、急に飛び出して来てだ、いきなりその男の顔と、草履とを見較べながら、結局、その中の一人が、まあ良かった、私の拵へた草履をお穿き下すつたんだわといふ訳で、まごまごしてゐる男を囚へ擁して、自分の家にまで拉し去つて行くさうな」

「へー、まるで、話に聞いた女護が島みたいどころだね」

「さうだ、まつたく女護が島みたいどころさうして、もういい加減帰らなきゃならないと気の附くころには、飛鳥の術に魅せられた黒碁石のやうに、もう怎うしてするにも憊うするにも、抜差しならぬ破目に陥つてゐるのださうな」

「おい、ほんとうの話か」

「ほんとうの話だ。君も精々小心して行き給へ行つた切りで、薩つ張り帰つて来ないなどといふことになると事だからね」

「一体、何時ごろの話なんだい」

「そいつがその、鳥渡ばかし、遠い昔の話らしいんだがね」

「おい、巫山戯んない」

(布田真花「琉球国記」、海21、1930、22-30頁)

資料5 与那国島の女護が島幻想に関する言説

与那国島は「女の国」である。昔から南の果てのこの島を「女護ヶ島」と名付づけて、見ぬ恋にあこがれさせたのも無理はない。それにしても、「此島の婦人色白く、且つ懇切多情なり、美人の心中に副ふ者あれば、只一個値三四銭の物を与ふれば、滞在中其人に常待し、酌を取つて終夜歓待す…」と彼の「南島探検」に勿體らしく書き記した弘前の藩士笹森儀助といふ御仁は、さても随分罪ないたづらを後世に遺したものだ。尤も其著者が探検(?)した明治二十六年頃迄は、たしかにさうであつたに違ひない。その昔、此の島に着くと先ず数多い島の女たちが波多浜辺に打集つて銘々の草履を置きならべ、其の草履を履いた人は即ち其の草履の持主の女によつて下にも置かずかしづかれたと、今は話に残るさうした事實は、曾て若かりし其頃の島の女たちには、ほほゑましい追憶の一つとして、密かに記憶の底に秘められて居ることであらう。

(本山桂川『南島情趣』、聚英閣、1925、160-166頁)

人で、豚を売るのも女なら、魚を売るのも女。その女達が高い台の上に一列に居らば、その前に青い魚、赤い魚、大きい鳥賊、何でもかんでも並べ立てて、あぐらをかいてゐるのもあり、豚の額や足をぶら下げて山刀然たるもので切売してゐるもあり、グロテスクな一奇観を呈してゐる。」²⁸⁾ といったように、那覇市内のエキゾチックな景物としての沖縄女性が、多くの紀行文に興味深く記述されていたことが確認される。

そしてなかでも那覇市の辻遊廓が、女護が島としての沖縄の幻想が投影される、具体的な場

所になっていたことを、いくつかの紀行文に見出すことができる。例えば、1934年に綴られたある紀行文では、「さて、琉球へ来て辻の話のせぬと云ふ事は、奥歯に物のはさまつた様なものであらうと思ふ…辻と申せば、内地で云ふ遊里であらう。大体に於て、貸座敷、待合、料理屋等を、混同したやうなもので、尾類子と称する妓達が、約三千人から居ると云ふのを聞いても、この一廓が女護ヶ島であることが分かる。」²⁹⁾ と、辻遊廓が観光客に注目されている状況と、そこが女護が島と位置づけられることを記している。

資料6 観光客の沖縄の心象地理と辻遊廓の消費に関する言説(1)

上陸すると龍下蘭の青い針の山やら榕樹のふかい木蔭、福木といふ小判形の色よい葉をもつた立木から、真赤な大きい佛桑花、白い茱梨花、天人花、赤桐といふやうな植物が、ほつかりした空気にもえてゐるやうですし、赤い屋根と阿旦の葉つ葉、珊瑚礁の浦葵の扇形の葉、想思樹と梅檀の並木のかげに石敢當がたつてゐて、苦瓜や鱧の胴切りや豚の子を笹に入れて頭で運ぶ女たちがほとんど半裸形のまま狭い小路をかけ廻つてゐるのが異様に目につきます。

…

市民以外の琉球人は男も女もはだして色のついた帷子のやうなもの一枚ですから、婦たちの乳房はすいて見え、尾類(遊女)などは白い麻の猿又をはいて、髪を四五尺もたらし動物のやうに歩いてゐます。

…

僕なんぞすぐ下痢をし癒けはじめて二十日も何一つする気にはなれませんでした。いろはへんに黄色くなるし力は失はれ、豚を主とする琉球料理と泡盛、果物なぞのおかげで一人前の琉球人になりますし、どこか万葉時代くさい訛だらけの琉球語を尾類たちから教へられて、数もしれないほどある琉歌をうたひはじめ、蛇皮線も舞踊もおもしろくなつて来て、誘はれるままに娼館や尾類の家に逗留するやうになります。茶屋御殿(料亭)の婦たちは漂客を伴つて自家へかへり幾日でも滞在させてくれますし、親兄弟もこの内地人を歓迎して尊い婿のやうに扱つてくれるので、つい旅行者は假の妻をもち、假に琉球娘の家に入婿したやうな気になるのです。さう月二十円も生活費を出してやれば喰つて泊つられるのです。悲しい琉球人等は昔からかうして支那と薩摩人のお機嫌をとつてみた遠風なのでしょう。

…

闇の夜の間や我身とまいて拝またまこがねさとや月夜にいまうれ

尾類はさう唄ひます。「たまこがねさと」は愛する男と云ふことです。さうしてこのたまこがねになつたら凡ての思想は破滅です。近代的な感情も何もあつたものではありません。

(佐藤惣之助『旅窓読本』、学芸社、1937、196-204頁)

2) 辻遊廓の成立とその特徴³⁰⁾

この辻遊廓の成立は古く、1672年に琉球王国の摂政であった向象賢によって設立されている。貿易港であった那覇には、中国からやってくる冊封使やその随行者を相手にする遊女屋敷が古くから沢山あったとされ、辻遊廓の発祥も、冊封使一行の宿泊する天使館の近くの龍界寺の住職が大勢の女性を集めて淫売させた事にはじまるといわれている。そして1609年に薩摩藩の支配下におかれてからは、中国との貿易による利益の大半を薩摩に奪われた上に、大陸の戦乱で交易が一時中断するという状況が生じ、

「フタカチヤの御代」と呼ばれる社会秩序の混乱と放蕩生活の時代を迎えており、その状況下で活発化した遊女の活動を取り締まるために遊廓が設置されている。この遊廓で遊んでいたのは、那覇や首里の人々と共に、先の冊封史の一行や、薩摩から派遣された在番奉行や役人であった。また遊廓としては、辻の外に渡地と仲島があったが、1908年に辻遊廓に統合されている。

辻遊廓は、尾類(ジュリ)と呼ばれる遊女と、数名から十名程度の彼女等を持つ抱親(アンマー)を中心に構成された、女性統治社会であった。1934年段階の辻遊廓には、176軒の女郎屋、329名の貸座敷業者、457名の娼妓、211名の芸妓、484名の雇女が存在していたとされる。また廃藩置県前の沖縄には、旅館も料理屋もなかったため、辻遊廓がこれを兼業し、沖縄唯一の社交場の役割を果たしていた。その後、漸次旅館や料理屋が増加したが(1937年段階で旅館10軒、料理屋7軒³¹⁾)、辻遊廓の地位はさほど低下しなかったといわれている。

3) 辻遊廓の観光空間化と心象地理

次に、観光客が辻遊廓を如何に利用していたのかを確認したい。この点について、1940年発行の『辻の女』(田中正男著)³²⁾には、「旅人が旅館に旅装を解くのと同じ気持ちで、“辻”の常連どもは堂々と真昼間から乗りつけてあたりまへのことのやうにすましてゐるし、土地の人々もあつさりこれを是認するところに“辻”の独特

資料7 観光客の沖縄の心象地理と辻遊廓の消費に関する言説(2)

いつか民俗学者C氏にお逢ひしたら、C氏は琉球で啖べますねえ——と云はれた。何を？夫れジパンクの島は、黄金で瓦を葺き、人肉を——とマルコ・ポーロ誌すところである。

確かにわれわれは食人帯にゐるのであるが、琉球では「マジシ」「シロジシ」といふ古語があつて、愛人が死ぬと赤いマジシ、近親はシロジシをやる、といふ説であるが、那覇の辻の尾類(遊女)と遊ぶと、よく(啖べてしまひたい程可愛い)といふ。

...

僕は山原生れのマカデーと称する馬來系の大女を愛してゐたが、彼女は牛のやうなイビキをかくので、僕は蠟燭でその黒金色の物体を、よく深夜に観察した。そして今は滅びた毛遊びと称する、野外の酒宴によく誘つた。間切りへ行くと、處女が泥の小池に、仔馬と共に水浴し、砂糖小屋の上に白鷺がとんで蘇鉄の花のぶんといふ風景だ。

...

僕が又、マカデーに、琉球では、啖べるか、啖るかといふものだから、マカデーは啖べる——と答へた。然しそれは愛の技巧の意味らしい。幸ひ僕は啖べられるほど可愛がられもせず帰つて来たが、マカデーが紺の上布の琉球服で、青い日傘を回し乍ら、三重城の埠頭へ見送りに来てくれた時は、ホロリとした。——といふと甘つたるい誇張のやうであるが、然し琉球にはそんな一面がある。何しろ珊瑚礁が浮いた縄(沖縄)ほどに見える島だ。その上に旧王国の首里の城廓が、鷺の糞ほどチョツピリ白く見えるところだ。尤も僕のいふ琉球とは、もう十年も前の話だが——あの気温や植物や女は今もなつかしい。蘇鉄地獄の唐芋地帯の、疲れた孤島苦といふ方面は別にして、まだまだどこかエキゾチックなことは確かだ。

(佐藤惣之助『旅窓読本』, 学芸社, 1937, 179-183頁)

の魅力が存在するのである。」と、当時の観光客は辻遊廓を頻繁に利用しており、かつそれが是認されていた状況が記されている。この辻の独特な性質は、「辻と称して居る一角がある。花街地だが、一種の宴会場、社交場だ。土地の人は不思議なくだれでもが、教員もお役人もここへ足をふみ入れる。」³³⁾などと多くの紀行文で描かれており、それは辻遊廓の特異性を指摘すると同時に、観光客がそこを利用する言い訳として語られていたことがみてとれる。

また先の大阪商船の団体旅行でも、第1日目の夜は辻での宴会がコースに含まれていた。第2回沖縄視察団団長も、大阪商船発行の雑誌『海』誌上で、「沖縄を訪れた者なら、恐らく辻町情緒を味はぬ者はあるまい。辻とは…全くの女護ヶ島である。…辻の女は体格も立派で、頗るの美人が多い。南国的な燃ゆる様な情熱があり、節操観念も頗る強いものがある。それだからこそ、土地の人にも旅人にも、遊女に対する様な考え方を全然してゐない様である。…女達は席上で蛇皮線を弾き、琴の音も混ぜて、声美しく歌ひ、優雅なる服装をこらして、古典の踊りも見せて呉れるのだ。」³⁴⁾と、辻遊廓の宣伝を行っている。まさに、中国からの冊封史一行

や薩摩藩の奉行・役人に代わり、観光客が外客としての辻の消費者になりはじめていたのである。

特に、1937年発行の紀行文『旅窓読本』(佐藤惣之助著)³⁵⁾には、辻遊廓の観光客の利用状況と同時に、そこへ筆者が投影した心象地理が詳細に記されている。佐藤は昭和初期の沖縄旅行に際して、資料6にあるように、那覇に上陸してまず亜熱帯の風景に注目すると同時に「半裸形」の女性に目を奪われ、その後、尾類を「動物のやうに歩いてゐます」と表現するなど、彼女達を野卑な住民たる低位の他者として見ていたことが確認される。さらに「いろはへんに黄色くなるし力は失はれ」と記すなど、悪環境としての亜熱帯を意識しつつ、「悲しい琉球人」の接遇の文化に溺れ、彼女達に愛されたら「凡ての思想は破滅です。近代的な感情も何もあつたものではありません」と述べている。このような南国の沖縄女性のエロティシズムの表象に織り込まれた奇異と侮蔑のまなざしは、資料7により詳細に記述されている。彼は沖縄における食人の話を持ち出し、それを自身の愛した「牛のやうなイビキをかく」「馬來系の大女」の尾類の性的な所作と関連づけ、野蛮な原住民の奔放

な性に関する心象を語っている。そして彼は、「気温や植物や女」を懐かしみ、「蘇鉄地獄の唐芋地帯の、疲れた孤島苦といふ方面は別にして」、沖縄が「まだまだどこかエキゾチック」であると語るが、その憧れのエキゾチックの中にも、低位の他所としての沖縄の心象地理が入り込んでいたのである。このように、男性観光客のエロティシズムの欲望が投影された沖縄の心象地理は、エキゾチックで楽園的な心象と、低位の他所の野卑な心象が混淆することで、より彼等にとって魅力的なものになっていたのだと考えられる。

4 沖縄観光と日本民芸協会同人の沖縄団体旅行

1) 柳宗悦の沖縄民芸への憧れと沖縄団体旅行

また、当時の観光客の多くは、沖縄の文化や芸術にも強い関心を示していた。例えば、1940年最初に実施された大阪商船の沖縄視察団に参加した川邊昌之³⁶⁾は、「島に船が近づくと点々と丘の上に白く見え」る「有名な墓」,「翠緑滴ると形容したい緑の色, エメラルドの海の色, 岸に打ちよせる白い波」,「最も絵画的に美しい効果を挙げてゐる赤い屋根の層々たる連なり」を見て、「夢の島と云ふ印象が旅人の胸に湧く」と、沖縄に到着するとすぐに自然と同時に独特の建築物に目を向け、夢の島であると語っている。そして沖縄の旅程の中では特に、懇親会の席で見た琉球舞踊と、壺屋の焼き物に興味を示していたことに言及している。この琉球舞踊については民芸運動を主導した柳宗悦が館長を務める東京の「日本民芸館の沖縄特別展の催し物として夜間その会場で見た琉球舞踊の素晴らしい美しさ」に事前に感動していたことを、壺屋の焼き物については日本民芸協会の同人である「濱田庄司さんの出来途中の品を見たり記念撮影までして来たのは喜ばしかった」ことを記しており、ここに沖縄観光への日本民芸協会の活動の影響を見出すことができる。

この日本民芸協会の沖縄への関わりは、直接的には1938年末から1939年初にかけて、柳宗悦が沖縄を訪問したことにはじまる。そこで柳

は、「私達のやうに伝統的な工芸品を求めて各地を歩いてゐる者には、琉球の存在は誠に奇跡のやうなもの」であり「此の土地色々な工芸品が純粋な状態でよく保持されてゐる所は他にないことが分かった」とし、「内地では古い日本が幾多の変化を受けて、旧の状態を失つて了つた場合が多いが、琉球にはそれがもつと純粋な姿で残されてゐるのである。云はば純日本的なものの量や質が、此の孤島にどこよりも多く保存されてゐる事がわかる。」と、沖縄に残された日本的なものへの強い関心を示している³⁷⁾。そしてこの関心に基づき、1939年3月末から、柳宗悦や濱田庄司を含めた総勢9名の日本民芸協会会員によって、約2ヶ月間の沖縄団体旅行が実施された。

この団体旅行の第一の目的は、工芸の勉強であった。また工芸に加え、その他の琉球の自然、建物、風俗、言語も含めて「吾々は琉球のよさを知りに行きたいのである。すぐれてゐる点を勉強に行きたいのである。感心しに行きたいのである。悦びと感謝の旅がしたいのである。」と柳は述べている。そして第二に、「どうして吾々が琉球のものに感心してゐるかを琉球の人達に聞いてもらひたいのである。遠く南端の孤島ではあり、中央と離れてゐるため、とかく島の人々は自身を卑下してかかる。寧ろ一日も早く内地の文化に追いつきたいと希ふ。併し琉球の存在の為にもつと正しい自覚が必要なのではないか。琉球の独自性に付いてもつと確信を有つていいではないか。」と琉球の独自性の再確認を住民に促すことを目的とし、「若し自覚なくして現状のままに放置されるなら、漸次其の独自性を失ふに至るだろう」と考え、「琉球の特色を傷つけずそれを益々発揮さす」ため「内地の要求を知つてゐる私達は、有効な或る助言を与え得るかも知れない」とその活動の方針について言及している。そして、工芸の工人たちの守護のための「生産や販売の正しい組織」の模索、さらには雑誌や展覧会を媒介にした琉球工芸の紹介までもが当初から見据えられていたことが確認される³⁸⁾。

ここでの柳の沖縄の心象地理にはいくつかの特徴がある。一つは、貧しい低位の地としての沖縄の心象を認識しつつも、そこを素晴らしき

資料8 柳宗悦の沖縄の心象地理に関する言説

私達の感激は旅行者の単なる印象に過ぎぬと思はれるかも知れません。又或ひとは趣味的に琉球を語るに過ぎないと評するかも知れません。併し私達の旅は遊びではなかったのです。…私達は気まぐれな旅行者ではなく、常に勤勉な探究者なのでありたいと希つてゐる者なのです。

…

今迄琉球に関して繰り返し聞かされたことは、此の島が如何に貧乏な所であるかと云ふことでした。畜に地理的に小さく、経済的に貧しいと云ふのみならず、文化も亦乏しく、生活も亦低いものであることを聞かされてゐました。…ですが、文化や暮しの姿をまで貧しいと考へるのは、大きな誤算とより思へないのです。私達は如何に琉球が様々な面に於て富有な琉球であるかを見ないわけに行きませんでした。…私達は何よりも先ず琉球の富に就て正しい認識を有たねばならないのです。之がない限り琉球を富ましめる道は、決して見出されはしないでせう。貧しい琉球をのみ見る限りは、琉球は遂に貧しさから脱れることは出来ないでせう。

…

吾々にとつての驚きは、此の南端の孤島が、最も正しく大和の風を伝承し続けたといふことです。日本のどんな土地に旅するとも、琉球に於る程、固有の日本がよく保存されてゐる土地を見出すことは出来ないのです。

…

近次国民の自覚が甦つて来ました。固有の日本こそは、此の要求に答へる貴い力なのです。此の場合、琉球の存在を重い意味を齎して来るのです。琉球はそれが有つ伝統的な特色あるものを、一つでも守護せねばならないのです。それは日本の独自の存在を構成する貴重な単位なのです。

…

今日迄琉球が重要な文化的課題として世論を喚び起こさなかつたのは、一つには琉球の人々自身の不必要な卑下にも因るのです。…特に日本の文化にとつて沖縄が如何に重要な位置に在るかの自覚を有たれんことを希ふものです。

…

外よりは敬念、内よりは自覚、此の二つの力が結ばれる所に、琉球の運命は安泰な基礎を得るであります。驚くべき宝庫である此の国を正しく認識し、其の繁栄を畫することは、凡ての日本人が負ふべき任務なのです。琉球の発展こそは、日本性の発揚そのものに外ならないのです。

(柳宗悦「沖縄での仕事」、月刊民芸1(8)、1939、8-12頁)

文化の地として想像し、後者の心象に力点を置いていることである。これについては、資料8の1939年11月に日本民芸協会が発行した『月刊民芸』「琉球特集」号において、柳が「此の島が如何に貧乏な所であるかと云ふこと」を聞かされていたが、「私達は如何に琉球が様々な面に於て富有な琉球であるかを見ないわけに行きませんでした」と述べている部分により明確に認めることができる。また二つ目に、柳がその素晴らしさの中に真正な日本を見出していることがある。これは、柳が沖縄の「純日本的なもの」の量や質に注目している先に挙げた言説に明らかであるし、資料8では「最も正しく大和の風を伝承し続けた」「固有の日本」として沖縄を語り、「琉球の発展こそは、日本性の発揚そのものに外ならないのです」とまで述べていること

が確認される。さらに三つ目として、この沖縄の日本的なものは、あくまで「純日本」であり「近代日本」ではなかったこと、すなわち本土と差異化された沖縄にこそ真に日本的なものは残されており、近代日本に取り込まれる均質化というベクトルの沖縄の日本化は、真正な日本を消滅させるものとみなされていたことがある。この思想が「早く内地の文化に追いつきたいと希ふ」という沖縄の人々を戒め、沖縄の独自性を保つようにとの発言へと繋がっている。

このような考えを持つ柳は、資料8の冒頭にあるように「気まぐれな旅行者」ではなく、「勤勉な探究者」として自身を定義していた。この峻別は、民芸運動指導者としての自身のアイデンティティであると同時に、沖縄の人々に「気まぐれな旅行者」の一員としてみられないため

の理由付けでもあったが、沖縄工芸の素晴らしさに注目し、非日常の他所に（日本という）真正性を求め、差異を希求する彼等が、「気まぐれな旅行者」とは異なるある特定の観光客のまなざしを有していたということでもあった³⁹⁾。民芸協会同人の外村吉之介が「琉球に入る近道は『辻』がいいといふ人が相当多い」が「芝居にくらべたら『辻』のごときは、もうひどい末期的な存在にすぎない」⁴⁰⁾と述べたように、一般的と想定される「観光客」とは異なるものに、洗練された観光客としての彼らは魅力を感じたのである。そして、当時の壺屋の陶工が「知識階級のものの家族同伴で日曜には壺屋に遊ぶ者が激増した。ために壺屋に小銭のおちることも多くなつた。」⁴¹⁾と語っていたように、『月刊民芸』などの雑誌メディアによる琉球工芸の紹介、1939年12月に開催された東京日本橋の高島屋における琉球新作工芸展覧会、幾度かの日本民芸館における琉球展、といった日本民芸協会の活動の影響によって、先の川邊のように、柳たちの沖縄へのまなざしを学習した人々が、文化や芸術に惹かれ沖縄を訪れる観光客になっていったのである。

2) 沖縄観光と文化に関する座談会と方言論争

また日本民芸協会は、中央の人々に「沖縄の意義を紹介したい意図」⁴²⁾をもって、1939年末から約2週間にわたる、第2回の沖縄団体旅行を主催した。このメンバーは、柳宗悦、濱田庄司をはじめとする9人の民芸協会同人、銀座松坂屋仕入れ部などの販売事務関係者2名、グラフィック編集部などの写真家3名、松竹の映画関係者2名、国際観光局の水澤澄夫と日本旅行協会（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）の井上昇三という観光事業関係者2名、その他評論家や医師などを含めた計26名によって構成されていた。柳は「出来るだけ文化度の高い観光団」で「絵はがきと図録と案内記と映画」を作る事を目的としてこのメンバーを招集し、また「互いに便宜を得ることにちがひない」⁴³⁾という理由で観光事業に携わる人も呼び寄せていた。

この沖縄訪問期間中の1月7日、沖縄観光協会と郷土協会の主催で「沖縄観光と文化を語る座

談会」が開催されている。そこには柳ら旅行団の主要なメンバーと、沖縄側として県警察部長、琉球新報社長、大阪商船支店長などが参加しており、「観光の立場からもつて積極的の活動をして、この素晴らしい土地を世界的のものとしてほしい」⁴⁴⁾という柳の発言の後、観光開発の方策について二人の観光の専門家から話がなされている。最初に国際観光局の水澤が、ホテル建設などの観光開発、伝統的な建築や景勝地の保存、景勝地への見苦しい構築物設置の禁止を訴えた。彼は続けて、「標準語奨励のポスターが各所に貼られてゐる。『いつもはきはき標準語』とか、『一家揃つて標準語』とかいふスローガンはわれわれに奇異の感を与えた。標準語の普及運動は結構だが、少しゆきすぎではゐないか。」と述べ、これに対して県警察部長が「標準語運動は県の大方針として、もつと徹底的にやるつもりである。…観光客が一時的の興味から方言をよろこび、それを保存しろなどと云はれては困る」と反論したことから、柳を含めて議論が紛糾し、この様子を沖縄の主要な3新聞（琉球新報・沖縄朝日新聞・沖縄日報）が報じたことから各紙上で大論争を巻き起こすことになった⁴⁵⁾。

この件に関して、特に1939年4月から標準語運動を積極的に推進していた県学務部が敏感に反応し、その社会教育主事は1月10日に「愛玩県」と題する一文を沖縄朝日新聞に寄せ、「彼等は余りにも県をその好奇心の対象にしてしまつてゐる。…もつとひどいものになると観賞用植物若くは愛玩用動物位にしか思つてゐないものもある。かかる人々に限つて常に沖縄礼賛を無暗に放送しては"またか"と思はせられるのである」と柳らを非難している。さらに翌日の主要3新聞には沖縄県学務部の名で「敢て県民に訴ふ民芸運動に迷ふな」⁴⁶⁾と題した声明文が掲載され、「皇紀二千六百年の拳果的精神運動として所期の目的の達成に更に拍車をかける」と宣言するに至っている。

これに対して柳は、「国語問題に関し沖縄県学務部に答ふるの書」⁴⁷⁾を1月14日の主要3新聞に掲載させ、「標準語も沖縄語も共に日本の国語」として重要であり、「標準語を学ばねばならぬ。之をよく習得することは日本国民として

の悦ばしい任務」であるが、「之が地方語への閉却となり、ややもすれば侮蔑となり、抑壓となるなら大きな誤りである」と主張し、「標準語を勉強せよ。されど同時に諸氏自身の所有である母語を振興せしめよ。…諸君は日本国民として不必要な遠慮に墮してはならぬ。県人よ、沖縄県民たることを誇りとせられよ。」と主張した。この柳の主張は、「固有の日本」を琉球で発見したように、ナショナリズムと対立したのではなく、むしろそれを推進するものであった。しかしながら、前節で検討したように、柳の考えとその主張は、均質化する近代日本よりも、差異化された場所たる沖縄に存在する真正な日本に注目するがために、県当局の目指す日本化とは異なるものであった。そして、アイデンティティを郷土の沖縄に求めろという柳たちは、沖縄を低位の地と考え、近代日本への同化を指向する沖縄県当局側（及び多くの沖縄県住民）と、アイデンティティのあり方をめぐって対立することになったのである⁴⁸⁾。ただし、標準語の重要性も併せて指摘したように、柳は近代的空間の矛盾というものをよく理解していたと考えられる。そもそも、標準語運動の行きすぎを諫めた国際観光局の水澤も、保存の問題だけでなく、ホテルなどの開発の問題も語っており、彼等は観光地としての沖縄に、この差異化と均質化のせめぎあう矛盾した空間たることを求めていたのである。

そして、このようなポリティカルな論争に巻き込まれるなかで、「観光客」という存在は、単純に差異化のみを求める傾向に押し込められ、かつ気まぐれに好奇の視線で沖縄をまなざす者と位置づけられて、県側からばかりでなく、それと差別化しようとする柳たちからも批判の対象にされていたのである。

3) 沖縄観光とアイデンティティ・ポリティクス

このように沖縄の観光は、様々な局面で沖縄人のアイデンティティと関わるポリティカルな問題に直面していた。たとえば、沖縄の呼称についても、「沖縄の印象」と題する紀行文を著した阿部金剛は、「この数葉の短文を物するに當つてすら、私は、『沖縄』と云ふ文字に當面する

毎に『琉球』と書かうとしては、沖縄と書き直す程の心づかひをしなければならぬ。…私たちは沖縄と云ふよりも、琉球と云ふ字の持つ余韻の中に多分の親愛を感じると思ふのであるが…」⁴⁹⁾と、琉球と書きたくてもそうできない状況を伝えている。この理由については、当時の観光案内には「他所では琉球といつた方が通じが早いけれど当地では沖縄といはねば分からぬ。それは沖縄は和名で古くからの名称であり、琉球は唐名で後についた名前だからであらう。いづれも同じ名ながら言語感情とは妙なもので土地の人は『沖縄』と呼ばれると如何にも親しみ深く感じる。」⁵⁰⁾などと説明がなされているが、ここにも先の方言論争と同じように、実際には近代期において本土的近代日本化を指向する沖縄県人のアイデンティティの問題が大きく影響していたと考えられる。例えば、日本民芸協会の第2回沖縄旅行団に参加していた日本旅行協会の井上昇三は、その成果を雑誌『旅』に発表する際に、「沖縄を琉球と云はぬ様、沖縄県を物珍らしく取扱はぬ様、特異の風俗・言語を他府県と比較したりその差を強調したりしない様等の注意を拂ふ必要を感じたのである。他府県の者として沖縄を旅しての印象を正直に記したり、まだ沖縄を知らぬ人々に出来るだけ沖縄に興味を抱かせる様に紹介しようとしたら、恐らく其の筆者は沖縄県民の多大の激怒を買ふに至るのであらうといふ不安があつたのである。」⁵¹⁾と記している。柳についても、方言論争以前は、概して「琉球」と記しているが、それ以後は「沖縄」の表記の使用頻度が多くなっていることが確認される。

またこの井上は先の座談会において、観光業関係者として国際観光局の水澤の後に意見を述べており、「日本で最も美しく、古格のある沖縄の方言はむしろ保存に努力すべき」と水澤の意見と同調すると同時に、「墓の美に驚嘆し、それを破壊せんとする意見の多いことに反対し、今後は新設を禁止してもよからうが、在来のものまで取除かせるのは、沖縄人の信仰生活を傷けるものである。」⁵²⁾と指摘している。この墓の問題も沖縄方言の時と同様に、県警察部長から「墓の問題にしてもあれに莫大な費用をかける風習を打破しなければならないし、衛生

上からも改善の必要がある。それに土地問題その他からみて土地の少ない沖縄にこのやうに乱立する墓を整理しなければならない。」と反論されている。

柳もこの墓の問題には注目しており、県警察部長が指摘したような、洗骨の衛生上の問題、沖縄の土地の狭さの問題、建立費用の問題で墓の廃止論が紛糾していることを指摘して、「衛生上から云つて、又実際から云つて、洗骨の風習は望ましいものではない。」とその意見の一部を受け入れている⁵³⁾。しかし、「此のことと今の墓を廃止することとは異なる問題」で火葬した遺骨を納めても差し支えないこと、占有する面積も「沖縄全面積」の「何千分の一にも足りぬ」ので問題でないこと、経費の問題も「一つの墓を多勢で共有してゐる」ため大きな負担ではないと反論し、「琉球の墓は様式から云つて、世界中最も立派な墳墓である。様々な種類はあるが、その優れたものになれば、芸術的価値が非常に高い。」とその保護を訴えている。衛生問題などで同調したがためにさほど大きな論争にはならなかったが、沖縄の墓（亀甲墓）の問題も、外客として差異化された美を重視する柳や観光業者の井上と、均質化された近代的日本空間としての本土化を目指す沖縄側とが対立する、政治的な争点となっていたのである。

この亀甲墓は、紀行文における記述も非常に多く、沖縄の中でも特に観光客の注目を集めていたことが確認される。それら紀行文では、「琉球の墓所のみごとな事は聞いて居たが、そのすばらしさにはまつたく驚嘆した。こんな堂々としたリズムカルなそして造形的な風景が日本にあるとは夢にも思はなかつた。この風景はまつたく西歐的と云つてよいだらう。」⁵⁴⁾、もしくは「ローマ古建築を思はせる実に立派な墳墓が那覇海岸邊のスロープに蝟集してゐる。荘重にして優美、恐らく美的価値から言ふもこれ程立派なものはないだらう。」⁵⁵⁾などと、亀甲墓から西洋的な建築をイメージしてその素晴らしさを語ったものを多く確認することができる。さらに墓地ばかりでなく洗骨についても、「内地人にとってはグロテスクなこの奇習も沖縄人にとっては極めて親愛の情溢ふる嬉しい佛事だと聞く。私はこの洗骨を見たいと思つて

明け方まだ薄暗い頃三四回この墓地をさまよつたが、遂に見られなかつた。」⁵⁶⁾などと、低位の野卑な心象と関係づけられながら時に観光客に関心をもたれるものであった。

しかしながら、ある沖縄在住の彫刻家は、「那覇市が近代都市の相貌を備へる為には、先づ今の墓地をどうにか整理しなければならないと誰も気が附くに違いない。…殊に観光地としての沖縄或は那覇市を考へる場合、現在至るところで眼につく、あの非芸術的な、そして自然の風致を買いする墓地は、どうしてもとりのけて了ひたい。」⁵⁷⁾として公営墳墓の構想を立て、観光地化をすすめるに際して既存の墓地の破壊が必要だと主張していた。まさに沖縄人にとってのアイデンティティの問題が観光に密接に絡まり合うなかで、観光客とホスト側の沖縄県住民の間では、観光の魅力として考える対象もそのあり方も、全くすれ違ってしまふという状況が生じていたのである。

5 小 括

本研究の成果をまとめると以下のようなになる。

- (1) 戦前期の沖縄へは、大阪商船をはじめとする海運交通の発達に伴い次第に観光客が訪れるようになり、1937年に大阪商船が船舶を大型化・高速化させて沖縄視察団を企画したところから沖縄観光が活発になった。当時の沖縄には「蘇鉄地獄」に代表される不況や熱帯の悪環境の心象と、南国の魅惑的でエキゾチックな心象というアンビバレントな心象地理が併存していたが、観光地として注目を集めるに従い後者の心象が前景化する傾向があったことが確認された。
- (2) また当時の沖縄には与那国島の女護が島幻想に代表される女性的なエロティシズムの心象地理があり、その心象は男性観光客が訪れ利用することが可能な那覇市の辻遊廓に投影され、そこが観光空間化していたことが確認された。中国からの冊封史や薩摩藩の奉行に代わる外客として辻遊廓を消費していた観光客は、従順でホスピタリティ溢れる女性が

いるエロティックな楽園としての沖縄の心象地理に、熱帯の野卑で奔放な女性のいる低位の悪環境という心象地理を織り込む傾向があったことが認められた。

- (3) さらに、1939年3月から柳宗悦を中心とした日本民芸協会同人が沖縄の工芸に憧れて沖縄団体旅行を行い、その後、沖縄工芸の宣伝を雑誌上や展覧会などで実施したことが、当時の沖縄観光の促進に影響を与えていたことが確認された。加えて1939年末から、沖縄の観光振興も企図した第2回沖縄旅行団が、柳たち民芸協会会員に写真家・映画関係者・観光事業関係者などを加えた総勢26名にて実施されたこと、そしてその際に彼等が参加した1940年1月に那覇市で開催された「沖縄観光と文化に関する座談会」で、標準語と方言に関する問題で県の役人と激しい意見対立をみせていたことが認められた。沖縄に近代日本としての均質性よりも真正な日本としての差異を求めて観光地化を考えていた柳たちは、この言語の問題に加え、墓地、沖縄の呼称問題について、本土的な近代日本たらんとする県の役人や住民とは対立する意見を持っていた。そしてそれらに関して展開された議論から、戦前の観光地としての沖縄には、均質化と差異化の近代の矛盾や、沖縄人にとってのアイデンティティの問題が非常に大きな関係を有していたことが判明した。

本稿において以上の成果を得たが、まだ検討が不十分な点も多い。まず沖縄の心象地理については、柳田国男をはじめとする沖縄学全般における沖縄認識や、沖縄における郷土概念の問題についても確認し、より詳細に検討する必要があると考えられる。沖縄の観光地化については、戦後の沖縄観光の調査を行い、本稿で議論した戦前の沖縄観光と心象地理に関する問題との関連を考察することが、そのプロセスの検討のために重要となる。もちろん、沖縄の戦前期の観光開発や、沖縄観光と関係した日本民芸協会の活動や柳の思想について、さらなる資料調査を行い再検討する必要もある。以上の点を今後の課題として、稿を閉じることにしたい。

[附 記]

本稿を作成するにあたり、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館、那覇市歴史資料室、琉球大学付属図書館に所蔵されている資料を利用させていただいた。特に沖縄県公文書館の武智方寛様には、貴重な助言をいただいた。

また資料収集にあたっては、科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「空間・場所をめぐる諸権力の解明——沖縄を事例としたフェミニスト分析から——」(研究代表者・吉田容子:課題番号15320118)の一部を利用させていただいた。

注

1. 大阪商船編『沖縄へ』, 大阪商船, 1939。
2. サイド, E. (今沢紀子訳)『オリエンタリズム』, テオリア叢書, 1986。
3. 前掲2. 54頁。
4. (1) Gregory, D., 'imaginative geographies' (Johnston, R.J., Gregory, D., Pratt, G. and Watts, M., eds, *The dictionary of Human Geography: Forth edition*, Blackwell, 2000), pp.372-373. (2) Duncan, J. and Gregory, D., 'Introduction'(Duncan, J. and D. Gregory ., eds., *Writes of Passage: Reading travel writing*, London: Routledge, 1999), pp.1-13.
5. 代表的なものとして, Duncan, J. and Gregory, D., eds., *Writes of Passage: Reading travel writing*, London: Routledge, 1999.がある。
6. 宮里一夫「沖縄観光史を見直す——戦前の沖縄観光について」, 観光とけいざい640, 2003, 4頁。
7. バーバ, H.K. (富山太佳夫訳)「他者の問題——差異, 差別, コロニアリズムの言説」(富山太佳夫編『文学の境界線』, 研究社出版, 1996), 167-207頁。
8. 前掲4. (2)
9. ルフェーブ, H. (齊藤日出治訳)『空間の生産』, 青木書店, 2000。
10. このような当時の沖縄の状況については、以下の書物を参考に論じた。(1) 島袋源一郎『新版 沖縄案内』, 日本出版, 1942。[改訂5版](2) 新里金福・大城立裕(琉球新報社編)『沖縄の百年 第三巻——歴史編 近代沖縄の歩み(下)』, 太田出版社, 1969。(3) 那覇市役所企画部市史編産室編『那覇市史 通史篇第2巻 近代史』, 那覇市役所, 1974。

11. このような戦前期の沖縄の海運交通の状況については、以下を参考に論じた。(1) 前掲10. (1)。(2) 前掲10. (3)。(3) 神田外茂夫編『大阪商船株式会社五十年史』、大阪商船株式会社、1934。(4) 岡田俊雄編『大阪商船株式会社八十年史』、大阪商船三井船舶株式会社、1966。(5) 大阪商船「沖縄航路・波上丸就航」、海63, 1936, 6-7頁。
12. 大阪商船「沖縄視察団員募集」、海101, 1940, 35頁。
13. 大阪商船「沖縄視察団員募集」、海78, 1938, 32頁。
14. 1937年発行の「暑中休暇利用 沖縄の観光 第五回団員募集」のパンフレットには、以下のような詳細な行程が記されている。7月25日午前10時に神戸兵庫突堤を出航し、7月27日午後2時に那覇入港、自動車で波上宮を参拝してから護国寺・県庁内の工業指導所・識名園を訪問、午後6時に那覇市の旅館（蓬莱館）に帰着して夜は「辻」で宴会、7月28日は午前8時に旅館出発し自動車で糸満町・首里城・郷土博物館・沖縄神社をめぐり、午後は円覚寺・泡盛醸造場・熱帯樹の桃原農園を見学して午後4時旅館に帰着し空手術見学、夕食後は沖縄古典劇見物、7月29日は午前8時に旅館出し、普天間宮・泊城・万座毛をめぐり、玉城村で闘牛見物して午後は自由行動、7月30日の午前10時に那覇港出航し、8月1日の正午に神戸兵庫突堤帰着。
15. 前掲13.
16. 米倉二郎「沖縄の旅」、海61, 1936, 9-11頁。
17. 前掲6.
18. 秋守常太郎『旅行叢書第四 沖縄土産』、秋守常太郎、1930。
19. ハンチングトン, E. (間崎萬里訳)『気候と文明』、中外文化協会、1922。
20. 本山桂川『南島情趣』、聚英閣、1925。
21. 辻井浩太郎「沖縄観光の思ひ出」、海80, 1938, 28-30頁。
22. 大野夢風「琉球遊記」、海39, 1934, 33-36頁。
23. 布田真花「琉球国記」、海21, 1930, 22-30頁。
24. 笹森儀助（東喜望校注）『南嶋探検1 琉球漫遊記』、平凡社、1982。
25. 前花は、人口の少なかった与那国島ではもともと多産を推奨していたが、1対6位の割合で女兒が産まれたため女性が増え、女護ヶ島と呼ばれていたことを伝えている。また、少ない男性をめぐって女性間の競争が生じたため、身なりが綺麗になったことや、結婚離婚という観念が希薄になり私生児が増えていたことを指摘している。前花哲雄『女護ヶ島——苛酷な人頭税物語』、琉球文教図書、1971。
26. 佐藤惣之助「沖縄の風色」、海77, 1938, 27-29頁。
27. 前掲21.
28. 前掲22.
29. 前掲22.
30. 本節は、管見の限り当時の辻遊廓の状況を最も詳細に描いていた、来和雀『沖縄の歓楽郷——辻の今昔』、久志助善、1934。を参考に記述した。
31. 仲吉朝陸『観光沖縄案内』、仲吉朝陸、1937。
32. 田中正男『辻の女』、田中正男、1940。
33. 鳥海青兒「沖縄行」、海99, 1939, 14-17頁。
34. 安藤奇峰「沖縄ばなし」、海68, 1937, 26頁。
35. 佐藤惣之助『旅窓読本』、学芸社、1937。
36. 川邊昌之「沖縄の印象」、海103, 1940, 30-31頁。
37. 柳宗悦「なぜ沖縄に同人一同で出かけるか」、月刊民芸1(1), 1939, 2-5頁。
38. 前掲37.
39. マッカネル (MacCannell, D.) は、観光客に非日常の時空間に本物の世界を見出しそこに「真正性 (オーセンティシティ)」を求める欲望があると指摘している。またアーリ (Urry, J.) は、観光客のまなざしとは常になにがしかの差異を求めるものだと論じている。まさに柳のまなざしは、観光客の特徴そのものであったといえる。(1) MacCannell, D., *The tourist: a new theory of the leisure class*, Macmillian Press 1976. (2) アーリ, J. (加太宏邦訳)『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』、法政大学出版局、1995。
40. 外村吉之介「琉球の近道」、月刊民芸1(8), 1939, 17-18頁。
41. 月刊民芸編集部 (田中俊雄)「民芸協会の琉球行はどんな影響をのこしたか」、月刊民芸1(8), 1939, 56-60頁。
42. 月刊民芸編集部 (田中俊雄)「問題の推移」、

- 月刊民芸2(3), 1940, 4-19頁。
43. 水澤澄夫「沖縄の風物と観光」, 月刊民芸2(3), 1940, 54-61頁。
44. 以下座談会の状況とその後の展開については前掲42. の記述による。
45. この論争については, 太田(1998)や小熊(1998), 竹中(1998)などによって, 柳の沖縄認識と日本人としての沖縄人のアイデンティティの問題に注目して, 検討がなされている。本稿は基本的に彼等と同じ論点に注目し, 多くはその認識も同じくする。しかしながら, この論争の端緒に沖縄観光に対する注目が深く関係していたことに焦点をあて, それ故にこの論争にて近代空間の矛盾した性質が顕在化したという点を強調する視点が, 彼等と異なっている。(1) 太田好信『トランスポジションの思想——文化人類学の再想像』, 世界思想社, 1998。(2) 小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』, 新曜社, 1998。(3) 竹中均『柳宗悦・民芸・社会理論——カルチュラル・スタディーズの試み』, 明石書店, 1999。
46. 沖縄県学務部「敢て県民に訴ふ民芸運動に迷ふな」, 月刊民芸2(3), 1940, 20-21頁。
47. 柳宗悦「国語問題に関し沖縄県学務部に答ふるの書」, 月刊民芸2(3), 1940, 22-27頁。
48. 方言論争における柳宗悦の言動については, 「軍国主義による国家統制への批判であり反抗」(水尾, 1992:207)として評価する立場と, 太田(前掲45. (1))や小熊(前掲45. (2))のように彼の認識をオリエンタリストのものとし, そのイデオロギー性に注目して批判的に言及する立場との間で対立がみられる。しかしながら, 本稿で近代空間の矛盾を指摘して論じたように, 柳の言動はそのどちらの性質も合わせ持っていたと考えるのが妥当であると思われる。水尾比呂志『評伝 柳宗悦』, 筑摩書房, 1992。
49. 阿部金剛「沖縄の印象」, 海76, 1938, 39-41頁。
50. 前掲10. (1)12頁。
51. 井上昇三「観光地としての沖縄」, 月刊民芸2(3), 1940, 46-48頁。
52. 前掲42. 5-6頁。
53. 柳宗悦「琉球の墓」, 月刊民芸2(3), 1940, 35-36頁。
54. 前掲33.
55. 伊東清永「沖縄紀行」, 海84, 1938, 34-46頁。
56. 前掲21.
57. 山田眞山「観光沖縄の公営墳墓」, 月刊琉球2(4), 1938, 16-18頁。
- (2004年5月12日 論文受理, 2004年7月2日 採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

Tourism in Okinawa and Imaginative Geographies in the Pre-war Era

Koji KANDA

In this paper, I examine the development of tourism in pre-war Okinawa, while paying attention to Okinawa's imaginative geographies. As a result, the following three points became clear:(1) In those days, Okinawa (located in the subtropical zone) had ambivalent imaginative geographies created by the people who lived in the mainland of Japan. One carried a bad image of mainly poverty and a nasty environment, the other carried a good image of a mainly exotic and paradise-like place. With the time-space compression between Okinawa and Japan's mainland, and through the development of maritime transportation, tourism in Okinawa gradually became active and therefore, especially after 1937, the good image of Okinawa was emphasized. (2) Okinawa was often imagined by male tourists as an erotic place. Because of this, the Tuji red-light district located in Naha city aroused attention and projected in its own way these mixed ambivalent images of exoticism, paradise, eroticism, poverty, barbarism, and so on. (3) The group tours to Okinawa in 1939 and 1940 which were held 2 times and which were organized by a member and sympathizer of the Japan Folk Crafts Association, raised tourists' interests in Okinawan culture, and revealed that the development of tourism in Okinawa was closely related to the identity politics of Japan and Okinawa, through discussions with government officials of Okinawa prefecture.

Keywords : Okinawa, Tourism, Imaginative geographies, Tuji red-light district, Japan Folk Crafts Association